第二言語習得において学習者の適性が学習成果に与える影響

向山　陽子

学位取得年月：平成 22 年 9 月
取得学位名：博士（人文科学）
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】言語分析能力、　音韻的短期記憶、　ワーキングメモリ、　適性プロフィール

【要旨】

第二言語習得においては習得順序、誤用タイプなど、学習者に共通する普遍性がある。その一方、習得の速度や到達レベルは学習者によって異なり、習得には個別性もある。第二言語習得の普遍性を追求する研究と比較すると、習得の個別性を解明する研究は数が少ない。習得の個別性に大きな影響を与える学習者の言語適性は、近年、Skehan によって情報処理の観点から再概念化が試みられている。Skehan は適性要素を音韻符号化能力、言語分析能力、記憶力の 3 つとし、それらが第二言語習得に与える影響は学習段階によって異なる、すなわち、学習段階と適性要素には相互作用があるという仮説を提示している。

本研究はその仮説に基づき、学習者の適性として言語分析能力、音韻的短期記憶、ワーキングメモリを取り上げ、それらが第二言語としての日本語学習に与える影響を縦断的に検証することを目的とした。コミュニケーション能力の養成を重視する日本語教育機関で、初級から学習を開始した中国人日本語学習者 37 名を対象として、(1) 学習開始前に適性を測定する 3 つのタスク (2) 学習開始後から 15 ヶ月後までの間に、3 ヶ月ごとに計 5 回、学習成果を測定する文法（筆記産出）、読解、聴解テスト (3) 学習開始 6 ヶ月後、15 ヶ月後の 2 回、会話テストを実施した。分析はテストを 5 回行った 3 つのスキル（文法・聴解・読解）と 2 回の会話を別個に扱い、適性要素の焦点を当てた分析（相関分析・重回帰分析）、及び適性プロフィール（適性要素の組み合わせパターン）に焦点を当てた分析（クラスタ分析・分散分析）を行った。したがって、本論文は 4 つの研究から構成される。

研究 1 では文法・聴解・読解に関して、3 つの適性要素と学習成果との関連を相関分析、重回帰分析で検討した。分析の結果、音韻的短期記憶は初期に重要、言語分析能力は一貫して重要、ワーキングメモリは学習が進んだ段階で重要であることが示された。また、学習成果の測定方法、測定時期によって異なるが、学習成果は言語分析能力、音韻的短期記憶によって説明された。

研究 2 では会話に関して、同様の分析を行った。その結果、他の 3 つのスキルと比較すると適性の関与が少ないこと、会話能力上位・下位を弁別するのは音韻的短期記憶であること、上級者を弁別するのは言語分析能力とワーキングメモリであることが明らかになった。

研究 3 では、学習者を適性プロフィールによって分類し、学習成果との関連を縦断的に検討した。適性テスト得点を基にクラスタ分析を行った結果、学習者は 5 つのクラスタに分類された。12 ヶ月後までの 4 回のテスト得点（文法、読解、聴解）と各クラスタの特徴との関連を検討した結果、以下のことが明らかになった。(1) 言語分析能力が高い学習者は成功するが、低い学習者は成功することが難しい。(2) 音韻的短期記憶が優れている学習者は初期には高い成果を得るが、言語分析能力が低い場合は学習が進むにつれて遅れが出る。(3) 音韻的短期記憶が低くても、言語分析能力が高い場合はその低さを補償できる。これらのことから、学習の成功には言語分析能力が重要であることが示唆された。

研究 4 では、各クラスタの特徴と会話能力との関連を検討した。その結果、次の 2 点が明らかになった。(1) 高い会話能力を獲得するためには言語分析能力、ワーキングメモリが高いだけではなく、音韻的短期記憶が高いことが不可欠であり、適性要素が高いレベルでバランスが取れている必要がある。(2) 平均程度の会話能力を獲得するためには適性要素すべてが一定レベル以上であることが必要である。

以上、4 つの研究から、学習段階によって関与する適性要素が異なること、スキルによって必要な適性要素が異なること、すなわち、適性要素、学習段階、スキルの間に相互作用があることが示された。

（むこうやま　ようこ）